

## 大友宗麟特輯号の発刊に当って

両豊・両筑・両肥及び日向・伊予半国の大領主として、またキリシタン大名として、大友宗麟の名はわが国はもちろん、遠く海外まで喧伝されている。しかし、そのようにポピュラーな史上の人物であるにもかかわらず、大友氏及び大友宗麟の研究は、案外行われていないというのが実情である。第一彼の出生の月日や死歿の時期についてさえ諸書に異同があり、また彼が死んだと云われる津久見の茶亭や墓地、天徳寺等の所在さえ、正確には判らないと云ってよい。また彼が天文二十年ザビエルから教をきいて以後、死に至るまで専心宣教師を保護したこと、しかも彼の入信は聖師に会ってから二十七年後のことであり、そうしたキリスト教に対する彼の態度、入信の動機等に至っては、諸説あって一致しない。まして大友氏の西遷土著の具体相、守護から守護大名、戦国大名えの上昇過程、戦国大名としての宗麟の経済的基礎、封建権力の構造、領国支配の方式、家臣団の編成、大版図の崩壊原因等々、中世史学界の主要課題に至っては、寡聞にして総合的かつ体系的な研究のあるのを聞かない。

当時の府内はキリスト教の中心地であり、明及び南蛮の諸船が来航し、堺・京・大阪等の豪商が集って盛んに貿易を行った。永祿五年宗麟が臼杵荘丹生島に築城移居してからは、臼杵が「豊後のローマ」となり、外国貿易の中心地となつた。府内や臼杵には明人の永住する者も多く、また堺の豪商の移住したものもあつた。キリシタン史上からはもちろん、商業史上から

見ても興味ある問題が多々あるが、史料の関係から未だ充分な研究が行われていないと云ってよい。

こうした際に、大友史料や大分県史料の刊行が着々と進捗しつつあることは喜ばしいことである。大分市長上田保氏の発議により、キリシタン博物館の建設が準備されつつあることも、研究の気運を促進させた。戦時中動員された神宮寺浦南蛮貿易の宗麟銅像の再建も、市によって間近かに行われると聞く。

こうした気運に促されて、本会も以上の企てに研究の面から協力し、後れた宗麟研究にメスを加えることにした。数多い課題を網羅することは至難であるが、それぞれ得意とする平素の研究の一端を発表して頂いた。われわれの微力が、宗麟のみならず、大友氏研究促進の一契機ともなれば幸いである。

(委員長 渡辺澄夫)